

コータン語『法華経綱要』の試訳

片 山 由 美

はじめに

本稿では Bailey [1971: 1-4] の英訳からの和訳を試みる。その際、ローマ字転写したコータン語テキスト (Bailey [1971: 53-57]) を参照し、単語リストやコータン語辞書を用い、() 内に筆者の補いで、コータン語、そして還元できる場合、それに対応する仏教梵語をアスタリスク*を付して記す。〔 〕は筆者の補いである。随時 Toda [1981] における『法華経』カシュガル写本のローマ字転写テキストを参照した。なお、『法華経綱要』の写本情報を含めた研究篇は拙論 (「コータン語『法華経綱要』の研究」『法華文化研究』40, 2014) を参照されたい。

1. 科文

試訳に基づく科門は以下の通りである。

- [0] 一乗について (帰敬偈)
- [1] 如是我聞、靈鷲山にて説法 (「序品」)
- [2] 世尊の二つの教示
 - [2.1] 七種成就の説示 (「序品」)
 - [2.2] 二つの甚深なる秘要の説示 (「方便品」)
 - [2.2.1] 三つの道 (=三乗)

コートン語『法華經綱要』の試訳 (片山)

- [2.2.2] 方便としての涅槃の都市 (「化城喩品」)
- [3] 火宅の譬喩 (「譬喩品」)
- [4] 雲雨の譬喩 (「菓草喩品」)
- [5] 『法華經』は諸經の宝
- [6] 「リャウ・ツァイ・シン」のために最初に説く
- [7] 五百弟子の授記 (「五百弟子受記品」)
- [8] ラーフラと十六羅漢
- [9] 「化城の譬喩」 (「化城喩品」)
- [10] 「宝珠の譬喩」 (「五百弟子受記品」)
- [11] アーナダとラーフラ、プールナの授記 (「授学無学人記品」)
- [12] 「穿井の譬喩」 (「法師品」)
- [13] 『法華經』の法は詳細であるが『法華經綱要』においては簡潔に教示
- [14] 四つの中の第二、大声聞への授記
- [15] ダルマラージカ仏塔の出現 (「見宝塔品」)
- [16] デーヴァダッタと聖仙 (「提婆達多品」)
- [17] 80コーティの菩薩、大地から涌出 (「從地涌出品」)
- [18] 三つの善い行い (*ācāra) に対する敬礼と無数の努力 (*utsāha) (「安樂行品」と「勸持品」)
- [19] 簡潔に經典を説明
- [20] 「医師の譬喩」 (「如来寿量品」)
- [21] 「五十人転展」 (「随喜功德品」)
- [22] 「六根清浄」 (「法師功德品」)
- [23] 『法華經』の法は詳細であるが『法華經綱要』においては簡潔に教示 (〔13〕と同様)
- [24] 四つの中の第二、コートン語による説示
- [25] 常不輕菩薩の苦行 (「常不輕菩薩品」)

- [26] 舌の軌跡 (「如来神力品」)
- [27] 常不輕菩薩による陀羅尼の説示 (「陀羅尼品」)
- [28] 一切喜見菩薩の燃身供養 (「薬王菩薩本事品」)
- [29] 妙音菩薩の神変 (「妙音菩薩品」)
- [30] 観世音菩薩と妙莊嚴王の慈悲 (「観世音菩薩普門品」と「妙莊嚴王本事品」)
- [31] 普賢菩薩の如く悟る (「普賢菩薩勸発品」)
- [32] 『法華經』の功德 (「囑累品」)
- [33] 大海の譬喩と一味 (ekarasa) の教義
- [34] 菩薩、声聞、神々、人、ナーガ、アスラ、キンナラ、ヤクシャによる『法華經綱要』の信受
- [35] 『法華經』を受持する者の清浄なる国土への生まれ変わり

2. 試訳

Siddham (sidhamā)

[0] [「帰敬偈」] 信心深い者は (ṣadyāya-, *śraddhā)、ekayāna、つまり一乗 (bārrai śau, *ekayāna)、仏陀 (baysa-, *buddha) の道 (paṃde) に対して (hālai, *ārdaka-)、今 (vaṃṇa)、帰依 (aurga) あらんことを (i)。まさに (kāḍi) 偉大なる (mista, *mahat) 秘要 (rrihāsa-, *rahasya) は、意味の上で (arthi)、非常に (tvari) 奥深いものであつて (pvistai)、[それは方便としての] 三つ (drayi) の道 (paṃdāvū) と [三つの道の] 一として (śau) の統合 (haṃgrathūṃ) である。⁽¹⁾

[1] [「序品」]⁽²⁾ このようにお聞きした (ttaṃ pyuṣṭā hamye, *evaṃ mayā śrutam)。偉大なる師 (mahāśāstāri, *mahā-śāstr) は、ある時 (śiṅa beḍa, *ekaṃ samayaṃ)、靈鷲山 (gridhikūṭā, *grḍhrakūṭa) の頂上 (gari vī) にいらっしゃつた (āstai ye, *viharati sma)。偉大な (mista) 聖仙 (rraṣayi, *rṣi)、比丘サンガ

(ga, *bhikṣu-saṃgha)、偉大なる (mista) 比丘尼サンガ (bisaṃgīmjai, *bhikṣṇī-saṃgha)⁽³⁾が、数 (phara) 千 (ysāra) の非常に高貴 (uvāra, *udāra) なものである菩薩達 (baudhasatva, *bodhisattva) に囲まれていた (karvinā)。

[2]

[2.1]〔世尊は〕七種 (hauda padya, *sapta-paḍi) の成就 (saṃpattā, *saṃpatti)⁽⁴⁾を彼らに (ttyāṃ hālai) 語られた (hve)⁽⁵⁾。

[2.2] 〔「方便品」〕〔世尊は〕そこで (vara) 甚深 (gaṃbira-, *gaṃbhira) にして二 (dve) つの非常に (kiḍa) 偉大なる (mista) 秘要 (rrihāsa-, *rahasya) について語られた (hve)。[2.2.1] 〔二つの甚深なる秘要とは〕三 (drayi) 〔つの道の秘要〕と、[2.2.2] それらのうちの一つである (sām-tt-ū) 涅槃の城 (nirivāṇva-kaṃtha, *nirvāṇa-nagara) 〔についての秘要である〕。

[3] 〔「譬喩品」〕〔火宅の譬喩〕諸々の欲望 (anuvima) が火宅 (pasve biśa) の〔喩え〕で示されているように (māṇaṃdū)、声聞 (śāvā, *śrāvaka) 達——輪廻世界 (saṃtsārā, *saṃsāra) の中で焼かれている (sūsti) 者は誰であっても——、大変あさましく (muśudum)、劣っていて (baka, *hīna)、火宅 (= 三界) から逃れようとする (pahaiṣṃdā)。

[4] 〔「薬草喩品」〕〔雲雨の譬喩〕神 (jasta)、仏陀たち (baysa) は、慈悲という雲から (pyaura jsi)、法 (dāvīne, *dharma) の雨 (bārā) を衆生達に (satvām, *sattvām) お注ぎになる (niśiṃdā)。彼ら (諸仏) は月 (pūra, *candra) と太陽 (aurmaysdām, *sūrya) のように (māṇaṃdū) 光線 (bāyi, *prabhā) を放ち (harūñiṃdā)、彼ら (諸仏) は〔仏〕道 (paṃda)、つまり涅槃と同等の (hamaṃgā) 〔道へ〕お導きになる (rrāsiṃdā)。まずもって、彼ら (諸仏) は一切衆生 (satva, *sattva) を諸々の苦 (dukhyau, *duḥkha) から解放させ (pariḥiṃdā)、〔そして〕彼ら (諸仏) は心 (aysmvinā, *manas) という器 (bhājina, *bhājana) を法 (dhāna, *dharma) で満たしている (hamberiṃdā)。

[5] これは、高貴なる (uvāra, *udāra) 『法華經』 (saddharmapuṇḍarī śi sūtri,

*saddharmapuṇḍarika-sūtra) である。⁽⁶⁾

[6] [そして『法華經』は] リヤウ・ツアイ・シン (ḍyau tceyi-śinā) のため (ūdiśāyi, *uddiśya) に最初に (āśni, *āstanya) 説かれた (biraṣṭā)。[『法華經』は] 諸大方等經典 (mahāvittūlya-sūttrīnai, *mahāvaitulya-sūtra) の宝 (raṃnā, *ratna) である。第一 (paḍauysā, *nidhāna) 章 (parivarttā, *parivarta) には 四種 (tcūraṃ nasā) の声聞が [説かれて] いた。⁽⁷⁾

[7] [「五百弟子受記品」] 第二 (śe, *dvitiya) [章]⁽⁸⁾ において、ここに (vira) 500人 (*pañca-bhikṣu-śata) の声聞 (śāvā, *śrāvaka) 達が座していた (ṇesta)。彼ら全員 (五百弟子) に対して一切知者 (sarvaṃñi-, *sarvajña) である仏陀 (baysā) は記別をお与えになった (vyārye, *vyākaraṇa)。余すこと無く (aharinām, *aśeṣa) 皆この偉大な (mistā) 秘要 (rrihāsa, *rahasya) をここで理解するでしょう (bvāñi)。

[8] [「授学無学人記品」] ラーフラ (rāhūlā) とともに十六 (kṣasū, *ṣodaśa) の偉大な (mista, *mahat) 聖仙 (rriśiyi-, *ṛṣi)⁽⁹⁾ [= 十六阿羅漢] にもまた、私 (世尊) は彼らにこの計画 (saña)、仏陀の道 (baysūnā paṃde) を教示します (uysdiśūmūṃ)。

[9] [「化城喩品」] [「化城の譬喩」]⁽¹⁰⁾ 隊商のリーダー (sāṭhikaṃ, sārtha-, *sārthavāha-) のために都市が化作 (nirma, *nirmita) されたように、ここに彼らを休息させるため (bitsāṃgyi, *viśrāma) に、彼 (世尊) は二乗 (dva yāna) [の涅槃] について語られた (hve)。声聞 (*śrāvaka) たちは都市の中心 (śva vi) にいて (ṣṭāna, *tiṣṭhati) 諸々の苦 (dukhyau, *duḥkha) によって憔悴 (stāvi, *kinna) した。

[10] [「五百弟子受記品」] [「衣裏繫珠の譬喩」] 彼ら (声聞達) は、仲間とともに (hayūnakyau jsa) 眠っている (hūsaṃdai) 人 (hvaṇḍye) の (biṃdā) 衣 (cauṣkā) の中央に (myāṃ) 非常に貴重な (avihā, *mūlyena) 宝石 (raṃnā) が縫い込まれている (bañiṃdā) ように、声聞 (śāvā, *śrāvaka) 達には (biṃda)

この (ṣi) 仏種姓 (baysūni gauttrā, *buddhagotra) が〔結びついて〕いる。彼ら (声聞達) はより高い (pīrūyū) [菩薩] 道 (cirya, *caryā) とその本性 (pr-arai, *prakṛti) について理解していない (ni ri bvāre)。

[11] [「授学無学人記品」] 長老 (sthiri, *sthavira) カウンディヌヤ (kauṭiṇa, *kauṇḍinya)⁽¹¹⁾ のように、ラーフラ (rāhulā, *rāhula) やアーナンダ (ānaṃdā, *ānanda)、プールナ (pūrṇi, *pūrṇa) をともなって (nvaiya) おり、ここにおいて (mari) [彼等は] 声聞 (śāvā, *śrāvaka) 達として言及されている (hvata)。彼等 (tṭyām) を始めとする者達に (paḍaaysāṇā jsi)、仏陀はこれ——これは一つであり、そして諸々の道 (paṃdām) (三乗) が同 (hami) — (śau) である——という記別を彼ら (声聞達) にお与えになった (vyārye, *vyākṛta)。その意味 (arthā) を熟考して下さい。

[12] [「法師品」「穿井の譬喩」] まるでちょうど (mānaṃdā)、乾いた (huṣṭyi) 土地の上 (śaṃde vīra) の乾いた (śakala) 場所で (śakala-brrimji, *ujjan-gala)、今、ここで彼等が水 (ūtci) を欲している (byehimḍā) にもかかわらず、そこに水があるのに気づかないで、むしろ阻まれて、そして何も持たずに (ttuṣā-dastā) いる時、[彼等は] 渴が乾いて (ttarina)、去って行く (tsimḍā) ように、その法を聴聞する彼ら (声聞達) は誰でも、悟り (biysānāma vū) を求めているが (kṣamā)、その法の教義 (nayi, *naya) を理解していない (ni bvāre)。彼等が、乾いた土地に水が全くと気づく (karā ūtci ni byide) のが困難である (duṣkara, *duṣkara) ように、彼 (声聞) にとって、[自分が仏になることができる] 目覚めるといふことは困難である (duṣkari)。

[13] 『法華経』(saddharmapuṇḍarī tṭye sūtrā) の中 (vira) で法 (dā) は詳細 (vistāri) [に説かれている] がここでは (mira) 簡潔 (hambistā, *samāsa) に教示されている (hvimḍe)。

[14] 四つ (catturi-bhāgā, *catur-bhāga) の中の第二 (śe) に、この (ṣa) 経典 (sūtrīnai) の宝 (raṃṇā, *ratna) が現れ (niraṃdā)、そこにおいて偉大な

る声聞達 (*mahāśrāvaka) へ記別が与えられた (vyārāma, *vyākaraṇa)。

[15] [[「見宝塔品」] 集会 (parṣi, *pariṣad) の中心において、ダルマラージカ (dimarāśā, *dharmarājika) [仏塔]⁽¹³⁾ が出現して (niraṃdā)、七宝 (hauda-ramṇi, *saptaratna) の塔 (auski, *stūpa) が虚空 (āsa-, *ākāśa) に昇った (sa)。「善いかな、善いかな (sādhākāri, *sādhukāra)」という清浄な音 (bijāśāna) とともに、虚空 (āsi-, *ākāśa) に音楽が [響き]、そして彼ら (諸仏) は華 (spye) に雨をはげしく (baysgā) お注ぎになった。十方 (daśau diśau) からこのような方法 (pacaḍna) で彼等、諸々の応身仏陀 (nirimāṇa-kāya baysa, *nirmānakāya buddha) と (u) 菩薩達 (baudhasatva) は、法の王 (dimarāśā) である仏 (jsām) 塔 (sthūpā, *stūpa) を見る (dyāme, *avalokaya) ために (kiṃṇa) お集まりになられた (āta)。

[16] [[「提婆達多品」]⁽¹⁴⁾ 師 (śāstārā) は私が (aysā) 王 (rre) になった時、想像をこえた多くの (phrarāka) カルパ (kalpa, *kalpa) をこころよく過ごされました (aciṃdya)。デーヴァダッタ (devidattā, *devadatta) という名 (*nāma) のこの聖仙 (riṣayā, *ṛṣi) は [私を] 見ました (dye)。彼 (ttye) から (jsai) も (ra) 私は (aysa) この (ttu) 偉大な (ūvāri) 経典を (sūttrā) 聞きました (pyūṣtem)。

[17] [[「從地涌出品」] 薬王 (bhaiṣajirrāji, *bhaiṣajyarāja) [菩薩] をはじめとする (pātca) 80 (haṣṭā, *ṣaṣṭi) コーティ (kūla, *koṭi) の菩薩 (baudhasatva) が涌き上がった (panava) 時、そこで彼らは清浄で偉大なる努力 (utsāhi) をした (puḍāṃdā)⁽¹⁵⁾。私たちは (mihe) この経典を (sūttrā) 最後の (ustam, *paścime) 時 (bāḍā, *kāla) まで保持するでしょう (dijsāma)。大地から (śaṃḍe jsa) こちらへ菩薩達 (baushasatva) が現れた (niraṃda)。

[18] [[「安樂行品」]⁽¹⁶⁾ それ故、彼ら (菩薩たち) は、数 (phara) 千 (ysāra) コーティ (kūla, *koṭi)、数えることができない (ahakhyīsa)、無量 (aṇascya)、考えも及ばない (hakhīsa) 間 (vaṣṭa)、偉大なる (ūvāri) 三種類 (drai padya)

の善い行い (ācāri, *ācāra) に尊敬を表して (gaurava jsa)、〔「勸持品」〕 無数の努力 (*utsāha)、つまり偉大なる (uvārā) 努力 (*utsāha) をした (yuḍāṃdā)。私たち (菩薩達) は、それ (衆生) を清浄に解脱させるために、各々の〔善〕趣 (śā śā ge, *gati) を保持しましょう (rrakṣāmā, *rakṣ-)。

[19] 私たちは簡潔にこの (ttu) 經典 (suttri) を説明します。この神、仏陀達 (jastā baysām, *deva buddha) のこの〔經典〕はあたかも衣 (cauṣkaṇa) の中の宝石 (raṃṇā) のようである。

[20] 〔「如来寿量品」〕〔「医師の譬喩」〕 私達はこの經典 (sūtrā) を最後の時 (ustimāṃjsī bādā) まで教示しましょう。その時、神、仏陀 (jastā baysā) は、50 (paṃjsāsā) カルパ (kalpa, *kapla)、集中して (simāhām vī, *samādhāna-) 座し (neṣṭā) 話をすること (avyāyāme jsa) なく喜びました。会衆 (parṣi, *pariṣad) の神通 (ridyau, *ṛddhi) の力によって (pañām jsa, *bala)、時が経過した時 (kalpa)、彼が〔布施〕を受け取った (pajāṣṭe) 最後の時 (ustam stye)、それが決定された (vidihye, *vidih-) 時、一切智者 (sarvaṃñā, *sarvajña) は〔次のように〕述べます。「私は般涅槃します (parinārvūṃ, *parinirvā-)。ああ、私の息子 (pūrya) よ。今、医者 (viji, *vaidya) のように (māṇāṃdā) 私は命 (jsina, *jiva) を救い出す (haṃgārūṃ)。私達 (諸仏) にとつて (mihā) あなた方 (子供達、衆生達) がみえる (ditta)⁽¹⁷⁾」その意味を (arthā) 〔知っている〕、そのような彼には、諸々の功德が (puṇai, *puṇya) 十分に (pharāki) 積まれる (ysyāre)。

[21] 〔「随喜功德品」〕〔「五十人転展」⁽¹⁸⁾〕 師資相承 (parambarai jsa, *paramparā) によって彼に随喜して (animaudyarā, *anumodaya-) 下さい。各々は、50番目 (paṃjsāsā) 〔まで〕に〔達成する〕でしょう。そして、彼 (法の伝授者) は悪趣 (avāyā, *apāya) に陥ることはないでしょう。

[22] 〔「法師功德品」〕〔「六根清浄」〕 六 (kṣa) 根 (iṃdrām) は浄化されており、そして50 (paṃjsāsāna) 〔の期間〕までこのよう (pacaḍana) である。こ

れはこのように偉大なる秘要 (rrihāsā, *rahasya) である。

[23] 『法華經』の中で法は詳細〔に説かれているの〕であるが、ここで(『法華經綱要』)それは簡潔に教示されている。

[24] 四つ (citturi-bhāga, *catur-bhāga) の中の第二に、コータン語 (hvamṇi hauna) で經典の意味が与えられている。それ故、彼らはおそらく法の意味を理解するであろう (bvāre)。

[25] 〔「常不輕菩薩品」〕常不輕 (sidāparibhuttā, *sadāparibhūta) 〔菩薩〕章 (parivarttā, *parivarta) においてこのような方法で〔知られている〕。衆生達はここで成熟している (*vipaka) 不快なこと (aysūṣkā) を私にもたらしたが、私は彼らのために苦難を (styūda) 忍んだ (nāṃdā)。そして、私は慈悲 (mittri, *maitri) を修習 (bhāvyem, *bhāvanā) し、そして法の真実性を教示した。

[26] 〔「如来神力品」⁽¹⁹⁾〕舌根 (biśā, *jivita-indriya) の驚異 (prrahāli, *ṛddhipratihārya) はそのように偉大な力を示した (distā)。

[27] 〔「陀羅尼品」〕常不輕 (sadāparabhūttā) 〔菩薩〕は、法の教示者 (dharmapāṇai, *dharmabhāṇaka) として、弟子達の前に陀羅尼 (dāraṇā, *dhāraṇi) の文句 (pana, *pada) を教示した。⁽²⁰⁾ 人々は (satva) 私を非難し (ahamañāṃdā, *adhimanya-)、本当に危害 (ṣṭikūla) を私に加えたが、私は慈悲 (mittra, *maitri) を修習 (bhāvyem, *bhāvanā) し、私は法の真実性 (dā bhava, *dharmabhūta) を語った (hvem)。

[28] 〔「薬王菩薩本事品」〕〔「燃身供養」⁽²¹⁾〕最終的に (usta)、〔一切〕喜見 (parriyi-darśa, *sarvasattva) priyadarśa) 〔菩薩〕となった (ṣṭāna) 時に、香 (buśāṇam jsa, *gandha) を塗り (aliyā, *bhakṣaya)、私はこの身体 (kāyi, *kāya) を燃やす。それ故に、彼らのために偉大なる法の灯明 (rrūṃdā) が昇る (sarbe)。これは第二 (śe) の偉業 (pūrva-yaugā) である。⁽²²⁾

[29] 〔「妙音菩薩品」〕妙音 (gadigesvari, *gadgadasvara) 菩薩 (baudhasatvā) はそれから (pātca) 神変 (prrahālyai, *prātihārya) を示した (dhyāṇe)。

[30] [「觀世音菩薩普門品」] 觀世音 (laukyeśvari-rrāji, *lokeśvararāja) [菩薩]、[「妙莊嚴王本事品」] 妙莊嚴 (śūbiviyūhā, *śubhavyūha) [王]⁽²³⁾ は悲をもって (muśdi, *karuṇā) 顯示する (ñuysdyi)。

[31] [「普賢菩薩勸發品」] 私はこの經典の意味を、あますところなしにすべて、悟りそしてその後 (pātcā)、核心について [悟った]。普賢 (samamttabhadrā, *samantabhadrā) [菩薩が悟った] ように (māñamḍā)。

[32] [「囑累品」] これらの法の功德 (dharmapuṇyām, *dharmapuṇya) を保持するために、彼らはこの經典 (sūtrī) を説き (hvāñimḍe)、そして (u) それを維持する (dijsāmḍe)。数千 (ysārā) 以上 (tvaḍa) の仏陀 (baysa) と同じぐらい多くの [人達] が生じた。師 (śāstārā) は、法座 (dharmāsnyī, *dharmāsana) に座し (*āna) それ (經典) を菩薩達に (baudhastavāni) 与えた⁽²⁴⁾。目に見える形 (pichaštū) であなたは、この經典を受け入れます。

[33] すべての (bisūnā) この水、大海 (mihā-simudrā, *mahā-samudra) の川 (nāvā) は、統合し (simādrāṣṭā, *samāsita)、流れゆき (jsāti)、大海にゆきつく (bāste)。そしてそれは「一 (śau, *eka) 味の (rraysā, *rasa)」と呼ばれている (hvīmḍe)。それ故、道が三 (drayi) 乗 (yāna) と呼ばれる。それ故また、[統一という] 点において、解脱 (gūstyā, *vimokṣa) は一つ (一解脱) で等しい。この偉大なる『法華經』においてこの意味は詳細である。その味 (一味) はすべてに行き渡る。

[34] ここなる偉大なる師 (śāstārā) は、この經典を簡潔に語られた (hve)。それ故、菩薩達、声聞 (śāvā, *śrāvaka) 達、神々 (dive, *devatā)、神 (jasta, *deva)、人 (hvaṃḍā, *manuṣya)、ナーガ (nāta, *nāga)、アスラ (aysūra, *asura)、キンナラ (kiṃnara, *kinnara)、ヤクシャ (yakṣa, *yakṣa) が満足させられ (saṃdauṣṭā, *santuṣṭa)、皆は、この簡潔な經典 (『法華經綱要』) を信じて、受け入れた。⁽²⁵⁾

[35] 『法華經』の中でその意味は詳細である。その味 (rriysi) はすべてに

コータン語『法華經綱要』の試訳 (片山)

(biśā) 行き渡る (ttramḍā)。学び (sāji)、読頌し、それを暗唱する (āsā) 者は清浄なる (pariśaudhvā, *pariśuddha-) 国土 (kṣittrvā, *kṣetra⁽²⁶⁾) に再び (śe ysamṭhā) 到達する (hīstā, *nipatīyati)。敬礼あれ (nauda)。

[Colophon] sī yāmmaji, Ḍyau si-khūṃ, palyesi śiḍā⁽²⁷⁾

〈略語と参考文献〉

KN See Kern and Nanjio [1908-1912]

Bailey, Harold Walter

1960 *Saka Documents, Portfolio I*. London: Percy Lund, Humphries & Co. LTD.

1965 "A Metrical Summary of the Saddharmapuṇḍarikasūtra in Gostanadeśa." *Bulletin of Tibetology* 2: 5-7.

1966 *Saka Documents Text Volume*. London: Percy Lund, Humphries & Co. LTD.

1969 *Indo-Scythian Studies being Khotanese Texts* Vol. I-III. Cambridge: The University Press.

1971a *Saddharmapuṇḍarikasūtra, Institute for the Comprehensive Study of Lotus Sūtra*. Tokyo: Rissho University.

1971b *Saddharmapuṇḍarikasūtra: The Summary in Khotan Saka, Titles on Oriental Studies and Asia*. Canberra: Australian National University, Faculty of Asian Studies.

1979 *Dictionary of Khotan Saka*. London: Cambridge University Press.

Emmerick, Ronald Erick

1968a *The Book of Zambasta Khotanese Poem on Buddhism (London Oriental Series, v. 21)* London: Oxford University Press.

1968b *Saka Grammatical Studies*. London: Oxford University Press.

Toda, Hirofumi

1981 *Saddharmapuṇḍarikasūtra, Central Asian Manuscripts, Romanized Text*. Tokushima: Kyoiku Shuppan Center.

Kern, Hendrik and Bunyiu Nanjio

1908-1912 *Saddharmapuṇḍarikasūtra (Bibliotheca Buddhica 10)*. St. Pétersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences.

〈注〉

- (1) Bailey は three being one と訳出しているが、drayi vari sām-tt-ū nirvāṇva kaṃṭha は “There (are) three, (and) one of them (-ū) (is) the city of Nirvāṇa” と解釈した方が適切であると考えられることを熊本先生からご教示頂いた。これは帰敬偈における drayi paṃdāv-ū haṃgrath-ūṃ sau “three paths and (-ū) their (-ūṃ) union (as) one” を言い換えた表現であると考えられる。
- (2) Toda 6b.4: evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān rājagṛhe viharati sma: gr[*d*]hrrakūṭe parvate mahatā bhikṣusaṃghena sārđhaṃ dvādaśabhir mahāśrāvakaśahasraiḥ……
- (3) Bailey は the great mendicant と訳出するがこの訳ではその前に語られる「比丘サンガ」と区別されず不適切である。そこで、次のように考えられることを熊本先生からご教示頂いた。bisamgīṃjai は bisamga- “bikṣusaṃgha” から作った形容詞 bisamgīnaa- の女性形 (-ja についている -ū は間違って書いたものと思われ、後から訂正して -ai を加えたと考えられる)。これは最も多いタイプの派生形容詞形成で、男性形 -inaa-, 女性形 -imjā- (-imgyā-) となる。ga’ “assembly” (Old Khotanese. ggāṣā’- Dictionary. 84a) が女性名詞であるからである。なお bisamga- は梵語や俗語系の単語は辞書に載せないという編集方針のため辞書の見出し語になっていない。
- (4) Bailey [1971b: 52] の中では、七種が何をさすのか明らかでないと言われているが hauda padya sampattā は『法華論』における「七種功德成就」のことであると考えられる。これについては拙論で詳細に論じた。
- (5) Bailey [1971b: 1] は “he taught” としているが hve は「彼は言う」という動詞の過去形の三人称の単数の形であるため「教示した」ではなく「語った」とコータン語から直訳した。
- (6) Bailey [1971b: 1] は [5] の後に「一章」(First Chapter) と訳出している。ところが、写本 (Pelliot chinois 2782) で10行目の末尾の paḍauysā parivartti は四角く囲ってあり、これは詩の一行先の冒頭を誤って書写したものを削除のためにマークしたものと解すべきであること、新コータン語の韻律は十分解明されていないが、このテキストは通常行末の punctuation があり、この部分を含めると明らかに行が長すぎることを熊本先生からご教示頂いた。従って Bailey [1971b: 1] は不適切であり、paḍauysā parivartti (First Chapter) は削除すべきである。
- (7) Bailey [1971b: 1] の英訳を直訳すると「これは一章四セクション (tcūraṃ nasā) である」(this is the fourth part of the first chapter) となるがこれでは意味が通じない。そこで熊本先生から次のようにご教示頂いた。tcūraṃ nasā

について *tcūra-* という形は序数詞の他に複合語の第一要素としても使われるので、*tcūra-nasa-* を複合語と解することも可能である。その場合、多少無理をして「リヤウ・ツアイ・シン」の行が本来は一行前にあったのが誤ってここに挿入されたと想定すれば、次の行の *ṣāvā* (= *śrāvaka*) を修飾して、*Nidāna-parivarta* では「四種の聴衆」があった (*catasr̥bhiḥ pariśadbhiḥ parivṛtaḥ*) といっているのか、という想定も可能である。このご指摘に基づいて、意味が通る翻訳を試みたが、この箇所をどのように読解するかは今後の課題としたい。『法華論』には四種声聞が説かれるため、四種声聞のことが意図されているのかもしれないと現時点では考えている。『法華經綱要』が『法華論』の影響を強く受けていることは拙論で論じているので参照されたい。

- (8) 前文に一章という表現があることから *parivarta* を補っている Bailey の翻訳に従って「章」を補った。
- (9) コータン語の *kṣasū mista rriṣiyi* を直訳すると「十六大仙人」、梵語に還元すると *ṣoḍaśa-mahārṣi* となる。カシュガル写本、その他の梵文写本にも「十六大仙人」という表現はない。*mahārṣi* は『法華經』において「仏」をさすものとして使用される語である。「十六」という数詞に注目すると「十六」の「王子」(*kumārabhūta*) が「化城喻品」に、「十六」の「大賢士」(*mahā-satpuruṣa*) が「序品」に見られる。ただし、前文では声聞授記について語られており、「ラーフラとともに」という文句があることから「十六羅漢」を指すと考えた。コータン撰述の仏教文献である *Zambasta* に「十六羅漢」の用例があることを熊本先生からご教示頂いた。
- (10) *Toda 183a5-7: tadva(t) tathāgataḥ satvānāṃ durbalāśayatāṃ viditvā yathā sa deśika ṛddhimayaṃ nagaram abhinirmiṇoti teṣāṃ satvānāṃ viśrāmanārthāya viśrāntā(m) ś cainā(m) viditvā evaṃ kathayati ṛddhimayaṃ nagaram iti evam eva bhikṣavas tathāgato 'hāṃ samyaksambuddha mahopāyakausālyeṇāntareṇa dve nirvāṇabhūmī satvānāṃ viśrāmanārthāya deśayati samprakāśayati yad idaṃ śrāvākabhūmī(m) pratyekabuddhabhūmiṃ ca*
- (11) *Toda 199b7-200a3: kaścīd evapurusaḥ kasyacid eva puruṣasyamitrākulaṃ bhikṣā(da)kulaṃ praviṣṭo bhavet sacāpya mitro ma[ha]ttasya cā suptasya vā anarghamulye maṇiratnaṃ coṭāntare ābadhniyād evaṃ c[ya]śasya vadet tavaīṣa bhau puruṣa maṇiratnaṃ dattaṃ bhavitv iti*
- (12) 「四つ (*catturi-bhāgā*, **catur-bhāga*) の中の第二 (*śe*)」という表現は、[24] にも見られるが、本文中に四つの中の第一や三や四の説明が全くない。これによって何が意図されているのか前後の文脈からも明らかではない。このことは写本 (P.2782) が、未完の草稿であった可能性を強く示唆している。

- (13) 法王塔 (dharma^rājīkastūpa) という表現はカシュガル写本になく、多宝塔 (prabhūtaratnastūpa) という表現が用いられる。他には tathāgatastūpa, mahāstūpa という表現も見られるのでここでは固有名詞としてのダルマラージカ仏塔ではなく、法の王としての偉大なる仏塔という意味で使用されていると理解できよう。
- (14) 「提婆達多品」で次のように言われている。Toda 248a6-248b3: ahaṃ sa tena kālena tena samayena rājā 'bhūvat syāt khalu punar bhikṣavo 'nyaḥ sa tena kālena tena samayena riṣir abhūn na khalu punar evaṃ ddrāṣṭavyam tat kasya hetoḥ ayam eva sa tena kālena tena samayena devadatto bhikṣur abhūt devadatto 'pi mama bhikṣavaḥ kalyānamitra(m)
- (15) 「従地涌出品」に次のような類似表現が見られるが「薬王菩薩」に関しては「従地涌出品」では登場しない。薬王菩薩は「法師品」において対合衆として登場する菩薩である。「60 (ṣaṣṭi) のガンジス河に等しい砂の数の幾百、千、コーティ、ナユタの菩薩」(Toda 284.b6-7: ṣa(ṣṭ)igamaṅganadivālukāsamāni bodhisattvakoṭṭinayu(taśa)tasahasrāni)
- (16) 「安樂行品」において4つの（身、口、意、誓願）法について説かれる。その際、「行処」(ācāra) と「親近処」(gocara) という表現が使用される。「行処」(ācāra) を三種に分類するという直接的な記述は見られない。想定されるのは、「誓願」を除く「身、口、意」の三種、或は「法師品」に見られる、「如来の部屋に入り（慈悲心）、如来の衣を着て（柔和な心）、如来の座に座し（一切法空を理解する）この経を説く」という三種である。
- (17) haṃgārūṃ jsina (39行目) についての Bailey [1971b: 3] “conduct [my life]” という訳は適切ではないことを熊本先生から次のようにご教示頂いた。動詞は基本的な意味が「外へと引き出す」であるはずで、前の行の parinārvūṃ とペアになっているはずで、むしろ同じ動詞が「救い出す、[苦しみから] 引き出す」の意味で使われる例がいくつかある (Dictionary 439a haḡāḍa-, haḡār-) ので、単純に「命を救う」でよい。次の mihā vā imi ditṭa で、ditṭa は「見る」ではなく「見える」の二人称、複数、現在形であり、主語は imi (二人称、複数) で、mihā は一人称、複数の代名詞の斜格でなければならぬ。「私たちにあって、あなた方が見える、現れる」というのが文法的に適切である。従って、Bailey [1971b: 3] “you see us, you look upon us” という訳は文法的に誤っている。
- (18) Toda 332a7-332b1: so'pi ta(m) śrutvā 'parasy' ācakṣet tato 'pi yena śrutam bhavet chrutvā cānumoditam bhavet so'py aparasya' ācakṣet yāvat, so'pi tam yāvat pa(ñcā)śa(t) paramparāyā

- (19) Toda 373a6-373b3: mukhavi(varāntarāc) ca jihvendriye abhyu(n)nāmayata te ca jihvendriye yāvad brahma(lo)kam anu(prāpte tābhyāṃ ca) jihvendriyābhyāṃ bahūni rāsmikoṭīnayutaśatasahasrāṇi niścarantā(ni tāsu ca suva) rṇaraśmiṣu ekaikasmād rras(myā) bodhisattvakoṭīnayutaśatasahasrā(ṇi niśceru)ḥ (Toda 374a4: jih)v(en)dr(i)yeṇar(d)dhi(prāthīhāyam) kurvanti)
- (20) 『法華經』には常不輕菩薩が法師として陀羅尼の文句を教示するという記述はない。しかし、「陀羅尼」というキーワードから「陀羅尼品」を想定した。
- (21) この部分はカシュガル写本の欠損部であるため参考のためKNを引用する。
KN 407.6-8: svayaṃ ātmabhāvaṃ divyar vastraiḥ pariveṣṭya gandhataila plutaṃ kṛtvā svakam adhiṣṭhānam akarot svakam adhiṣṭhānaṃ kṛtvā svam kāyaṃ prajvālayāmāsa tathāgatasya pūjākarmaṇe 'sya ca saddharmapuṇḍarikasya dharmaparyāyasya pūjārtham /
- (22) 第一の偉業について言及されていないが第一は常不輕菩薩の偉業と考えられる。
- (23) カシュガル本は、「妙莊嚴王」(śubhavyūharāja) であるため、「王」(rāja) を補って訳出した。
- (24) 直接的に「委嘱」(anuparindanā) という語は見られないが、釈尊が菩薩に經典を与えるということや、「普賢菩薩勸発品」の後にある品として「嘱累品」が想定されているのかもしれないと考えた。
- (25) 「嘱累品」の後半部は断片のみで欠損している部分が多い。しかし、KN 483.1-5を参照するならば如来や菩薩、声聞、四衆、神々、人間、アスラ、ガンダルヴァに伴われた世間の人々も、心が満たされ、世尊が言われたことを〔聞いて〕喜んだ」という文句で「嘱累品」が終わる。『法華經綱要』の文句もこれにパラレルであると考えられる。
- (26) カシュガル写本の中に『法華經』を受持する者が来世浄められた国土にいくという表現は見られない。他の經典の影響を受けているのかもしれない。
- (27) 61行の詩文の後にコロフォンがあり、三人の名前があがっている。Baileyは彼らをpatronと解釈しており、二番目の「司空」である「リャウ」とは、本文中の「リャウ・ウァイ・シン」であるとみなしているが、これだけの記述では同一人物かどうか決定することは不可能である。

〈付記〉

本稿は平成25年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。なお、身延山大学特任講師の金炳坤(慧鏡)先生からコータン語『法華經綱要』に関する資料を頂いたのが翻訳の契機となった。また、東京大学名誉教授の熊本裕先

コータン語『法華経綱要』の試訳（片山）

生からコータン語の翻訳に関する様々な助言を頂いた。深く感謝申し上げます。

〈キーワード〉

コータン語、『法華経綱要』、カシュガル写本、『法華経』